

家庭と幼稚園のあり方について

家庭、幼稚園のそれぞれの役割と関係責任

幼児の教育にとって、家庭も幼稚園も、それぞれ重要な役割を果たしているが、家庭と幼稚園とが、どのような関係にあることが望ましいかということについては、家庭の側でも、幼稚園の側でも、必ずしもはっきりと、とらえられているとは言えない。

ある幼稚園の母の会でのことである。一人の母親が、「先生、うちの子は、幼稚園では先生に言われて歯をみがいているようですが、うちではみがかないので、困っています。私と言っても、言うことをきかないので、先生の方から、ちょっと注意していただけませんか？」と頼んでいる。

島中 徳子



また、先生の方は別な問題で、母親たちにこんな注文をだしている。「私が話をしていると、よく途中から、『あ、ね、ほくね……』と言って、とびだしてくる子がいます。話がとてもしにくいですね。人の話を最後までできなくて、いうことができないのです。家庭で、よくしつけておいて下さい。」

このような例は、どこか父母会でもきかれる話ではないかと思われるが、よく考えてみると、母親も保育者も「子どもとの関係における自己の責任」を放棄していることにならないであろうか。

家庭で、歯をみがかない子どもに歯をみがくように導くのは、子どもとかかわっている親の役割であり、どのような子どもに働きかけるかは、それぞれの家庭の状況によっ

て異なってくる。その状況で、最も適した働きかけができるのは、その場で子どもとかかわっている親であり、その場には先生にはできないことである。子どもとの関係における親の役割であり、その役割を果たす責任がある。

同様に幼稚園では、どんな問題でも、保育者と子どもたちは保育者との関係で、また他の子どもとの関係で行動しているのである。家庭で親と一対一で話している時とは、ちがう状況にいる。家庭で親は、最後までゆっくり、子どもの話をきいてやれる。子どもも親には、あわてて話す必要がないかもしれない。しかし集団では状況が異なっている。先生にはその時しか話せないのかもしれない。人の話を最後まで大きく必要がないというのではない。保育者が集団状況をとりえて、子どもとの関係で解決すべき問題であって、その場にはいない母親が、家庭でしつけられる問題ではないということである。幼稚園という保育の場をつくっているのは、子どもたちであり、保育者である。保育の場における問題の解決は、子どもたちとの関係における保育者の責任である。

この春、子どもたちをはじめ幼稚園へ送り出す家庭も、その子どもたちを迎える幼稚園も、このことについて

の認識を新たにする必要がある。入園の時期がせまると、家庭ではなんとか子どもを自立させたいと願うあまり、
“そんなこともできないと幼稚園に入れてもらえない”とか、“幼稚園の先生に叱られますよ”と言って、幼稚園を子どもへの切り札にしてしまう。これでは、子どもが幼稚園に入る前から、保育者と子どもの関係をゆがめてしまうおそれがある。

家庭でのしつけは、あくまでも親子関係の発展を目ざす親子の役割のとり方の問題であり、親は、自己の役割を遂行することに責任をもたなければならない。幼稚園へ責任を転嫁すべきではない。

幼稚園の側でも、さまざまな家庭で育った子どもたちを受け入れる時に、家庭環境、親の態度というものに関心をはらうのあまり、子どもの行動を家庭と結びつけすぎではないであろうか。よく、“子どもを見ると親がわかる”という保育者があるが、子どもの行動が集団からはずれているととらえると、それを家庭での教育のあり方のせいだと思いきみがちである。たしかに、さまざまな家庭があり、親のふるまい方があり、子どものパーソナリティの形成に大きな影響を与えてはいるが、幼稚園という集団にあつては、子どもたちとの関係においてふるまう保育者があ

り、保育者との関係で、子どもたちはふるまっているのである。どのような家庭で育った子どもでも、一つの集団の中で、新しい状況においてふるまっている。そこで子どもたちは、自己、人、物とのかかわりあいをもち、行為の可能性をひろげようとふるまっている。集団における問題の解決は、子どもたちとの関係の発展を目ざしている保育者自身に、責任がある。

家庭と幼稚園との交流の方法

家庭も幼稚園も、それぞれの場において、子どもとの関係における責任を果たすことが大切であるが、それぞれかわりなく、家庭は家庭、幼稚園は幼稚園ということでは、どういふ方法で、家庭と幼稚園の交流があればよいのであろうか。

家庭での教育も、幼稚園での教育も、幼児の望ましいパーソナリティを形成するという大きな目的、方向性は同じであり、また、それは、集団の中で、対人関係をとおして育つという点に関しても、共通のものがある。しかし、いふまでもなく、家庭は、家庭という、年齢構成も多様で、血縁関係を主とした小集団であるが、幼稚園は、同年齢に

近い子どもたちや保育者からなる大きな集団であり、ここでの人間関係は、家庭のそれとはかなり異なっている。したがって、それぞれの場における教育の内容も異なる面がある。たとえば、「手を洗う」ということひとつでも、家庭では、ゆっくり、ていねいに洗うことが目ざされるが、幼稚園では、順番を守って、時間の中ということが目ざされる。それぞれの場において、育つもの、伸びる面が、互いに生かされて、幼児の望ましいパーソナリティが形成されていく。

家庭と幼稚園という集団状況としてのちがいを、「差」とえられ、その上で、それぞれの領域に共通なもの（たとえば、子どもの人や物、課題へのかかわり方）が、それぞれの領域から発見され、子どもの可能性を伸ばすためには、どのようなまわりからの働きかけが必要なのかという話し合い、交流の場が必要になってくる。それは、幼稚園と家庭を結ぶ「連絡船」であったり、「父母会での話し合い」というかたちなのである。

ある幼稚園での例である。その幼稚園では、必ずしも、遊具などの片づけをしなくてもよいことになっている。子どもにまたあとで使う予定があるという理由があるとき、片づけをしないうことが認められている。それを連絡帳

で知らされたある家庭では、子どもの意図をとらえ、幼稚園での教育のあり方を受け入れながらも、家庭生活に必要な空間と子どもの占めている空間の調整をせまられて、家庭では、部分的にでも片づけが必要であることを、子どもにも、幼稚園の方にも理解してもらおうように働きかけたという。

これは、幼稚園や家庭で子どもとのかかわりあいにおいて、体験しながらとらえているものを、互いにだしあうことにより、子どもとの関係発展の方向性をさぐり、その発展をもたらす方法を発見していく過程である。けっして、一方的な幼稚園側の家庭への指導というようなものではない。

子どもの教育にとって、このような家庭と幼稚園の交流はきわめて大切なことであるが、交流がうまくいかないとき、あるいは、新しい領域での子どもの可能性を発見することが必要になったときは、地域社会にある教育相談などの機能が生かされるべきであろう。教育相談活動とおして、親も保育者も、子どもの新しい可能性を発見し、自己の新しいふるまい方を発見できることがある。地域社会における教育相談活動は、家庭と幼稚園との関係に発展をもたらすことのできる機能を常に果たしていることが必要で

あろう。(注)

おわりに、幼児の教育は、家庭と幼稚園でのみ、果たせるものではない。家庭と幼稚園が、子どもとの関係において、それぞれの役割をもち、その関係において、その役割を責任をもって遂行しようとする、どうしても地域社会へ、国家へと働きかけざるを得ない問題がたくさんある。たとえば、子どもの生命を交通事故から守ろうとすれば、積極的に社会へ働きかけなければ、子どもの生命を守ることが危い時代になっている。このような共通の目標に向かって、家庭も幼稚園も、互いに交流して、新しいエネルギーを生みださなければならぬときであると思う。

(立教女学院短大幼児教育科)

注 昭和四十五、四十六、四十七年度 文京区教育セ

ンター紀要 参照